

〔成果報告〕

共感的な人間関係を構築するための校内研修の在り方

ー 校内授業研究・研修組織の改編を通して ー

中川 龍太
教育実践高度化専攻
学校運営コース

1 テーマ設定の理由

(1) 今日の課題から

2021 年 1 月の中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、学校教育において、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することを求めている。他方で、コロナウイルス拡大により協働的な学びが制限された。日常生活が戻りつつある今だからこそ共感的な人間関係構築を目指した教育活動が必要だと考えた。また、教職員の研修に関する社会的な背景にも、近年大きな変動が起きている（教員免許更新制の廃止、研修履歴の活用等）。このことから学校は、組織的に学ぶ校内研修の活性化が必要だと考えた。

本校は、授業研修会を通して教職員の児童理解力と授業力向上を図ってきた。しかし、個人の成長に着目しており、児童間の関わりが共感的だったのかに着目していなかった。また本校には、研究推進委員会が存在するものの、機能していなかったことが研究主任への聞き取りから分かった。このことから本校は、校内授業研修会や研修組織の改編を通して、児童間の共感的な人間関係構築を目的とした教育活動・授業づくりが必要だと考え、本研究テーマを設定した。

2 研究を通して明らかにしたいこと（研究の目的・視点）

(1) 共感的な人間関係の構築に向けた、校内研修の活性化を図る。

(2) 校内授業研究・研修組織の改編を通して、児童間の共感的な人間関係構築をめざした教育活動が展開されたかを明らかにする。

3 基本的な考え方

(1) 共感的な人間関係について

文部科学省『生徒指導提要（改訂版）』（2022 年）には、「学級経営・ホームルーム経営の焦点は、（中略）、自他の個性を尊重し、相手の立場に立って考え、行動できる相互扶助的で共感的な人間関係をいかに早期に創りあげるかが重要」だと記載されている。この指摘から、本研究では、共感的な人間関係を「自他の尊重・相手の立場に立つ・相互扶助」の 3 つの要素と捉える。

(2) 校内研修について

茨城県教育委員会「令和 6 年度学校教育指導方針」には、校内研修の内容を「研修テーマに基づく研修」「教育課題に関する研修」「教職員の希望による研修」「管理職等からの指示事項に関する研修」の 4 つを挙げている。

(3) 校内授業研究について

鹿毛は、「校内授業研究とは、日常的に職場をともにする同僚同士が自分たちの授業実践の質を高めていくために（中略）、きわめて優れたアプローチ」と述べている（鹿毛雅治『「校内研究」を創る』教育出版、2017）。また、「授業研究の目的は、『教師を育てる』と『学校を育てる』という授業研究の二つの力を発揮」するとしている（木村優『授業研究』新曜社出版、2019）。

(2)、(3)を踏まえ、校内授業研究を「研修テーマに基づく研修」と捉え、授業を見合い、個々の成長だけでなく、学校組織としての成熟も目指す点にその意義を見出し、研究を進めていく。

4 研究の構想

(1) 組織目標と校内授業研究

昨年度の意識調査や聞き取り調査から、共感的な人間関係が必要であることが分かった。この課題を共通認識し、年間を通して教育活動を行う際の核にしていきたいと考えた（資料1）。

また、市教委から一人一人に年度内に取り組みたい授業研究テーマ（自主課題）の設定を求められた。この自主課題が組織目標や学年のめざす児童像の言葉を活用できれば、関連付けが図られて組織的な学びになると考えた。

(2) ブロック研修会の実施

本校は、年度初めに実施日や教科を割り振り、学年ブロックで実施してきた。しかし、児童の現状や自主課題を検討するためには、学年で考慮した時期に実施した方が効果的である。また、誰でも参観できるように職員終会で伝達し、閉鎖的な研修にならないような配慮が必要だと考えた。

協議会では、児童一人の学びにフォーカスが当てられており、ねらいに迫っていたのか、学年のめざす児童像に近づいているのか、などを語り合うまでいかなかった。そこで、見取りシートには、学年のめざす児童像や本時のねらいなどの見取る視点を記載し、明確化することにした。

(3) 研修組織の改編

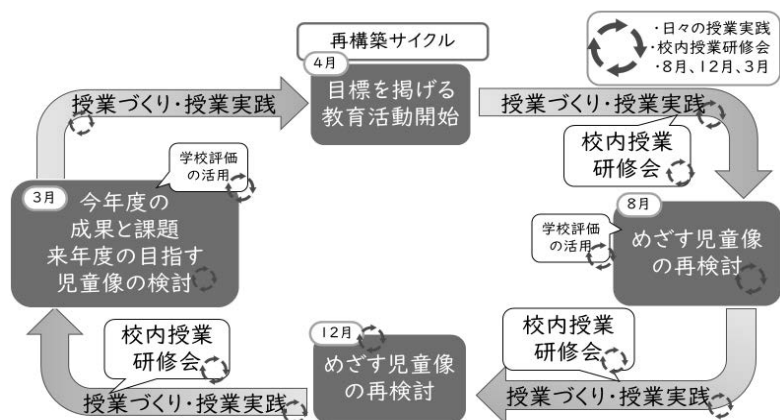
研究主任が全ての校内研修に関わってきたことで多忙になり、後回しになったり目的がはっきりしなかったりと、本校の課題に迫った校内研修を企画・運営するのは難しかったといえる。そこで本研究では、「授業研究部」「校内研修部」「情報部」の3つの組織を創り、それぞれの立場から、本校の課題解決に向けた校内研修を実施していくこととする。

5 研究の実際

(1) 組織目標と校内授業研究

昨年度末に、児童の名前を出しながら実体験をもとにして成果や課題を語り合うことができた。4月に学校長が出した、組織目標の中には「共感的な人間関係の育成（認め合い、励まし合い、支え合う力）」という言葉が入り、学校全体で「共感的な人間関係」を構築する体制ができた。

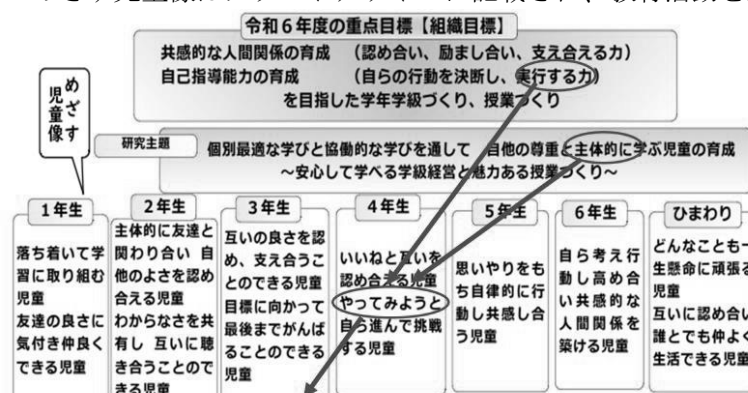
4月2日には、昨年度の学年職員が記録したワークシートとグランドデザインをもとにして、学



資料1：再構築サイクル

年のめざす児童像を検討する研修を行った。また、「学習指導要領総則編 第1節 小学校教育の基本と教育課程の役割 1 教育課程編成の原則 (2) 教育課程の編成の原則 (ア) 児童の心身の発達の段階や特性」を資料として配付した。学年主任を中心に、資料をもとにして学年のめざす児童像を検討できた。決定した各学年のめざす児童像はグランドデザインに記載され、教育活動を企画・運営する際の基盤となった。

6月には、自主課題の設定方法について研修した。その際、組織目標とのつながりが分かる資料や自主課題の例を提示した(資料2)。この研修を通して、第6学年1組担任の自主課題には「友達の個性に気付き」という言葉が入った。「友達の個性に気付き」は



自主課題例:「やってみよう!」と主体的に学ぶ力を高める授業実践
資料2:組織目標と自主課題のつながり
共感的な人間関係の「自他の尊重」にあたる言葉である。その他の教員の自主課題にも、「友達の関わりを大切に」「共感的な人間関係を構築する」「よりより人間関係を築こうとする」などの言葉が使われており、組織目標やめざす児童像、研究主題と自主課題につながりが生まれた。

(2) ブロック研修会

ブロック研修会は、学年の実態に応じて内容・日程等を話し合って実施することができた。本稿では、共感的な人間関係に関する自主課題を設定した教員の授業を2つ取り上げる。

6月27日には、中学年ブロック研修会が開かれた(3学年1組 国語)。授業は音読から始まり、読んでどのような様子を想像したのかを児童は語り合っていた。学級児童やI先生は、発言に頷いたり、「なるほど。」とつぶやいたりしていた。参観者の見取りシートには、「AさんとIさんの発言に、うんうんと首を振りながら聞いているかかわり方が素敵でした(3年目教諭)。」と、児童の名前や具体的な姿を見取ることができていた。共感的な人間関係の「自他の尊重」「相手の立場に立つ」にふれる内容であった。

10月16日には、低学年ブロック研修会が開かれた(2学年1組 特別な教科道徳)。授業では、中心となる場面の様子やどうして子ぎつねは「ありがとう」と言ったのをペアで交流することで、児童はお母さんの思いを感じ取ることができていた。普段からペアでのかかわりを取り入れ、自主課題の副題にある「自分の考えをもち、互いに認め合える」の実現を目指していた。参観者の見取りシートには、「ペア同士の距離感や声の大きさがよく、聴き合う関係ができていた(ベテラン教諭)」という記述があり、児童間の共感的な人間関係を見取ることができていた。

ブロック研修会は、終会で内容等が伝達されたことで他学年の職員も参観する姿が見られた。

(3) 研修組織の改編

授業研究部では、研究主任が授業の目的や在り方を伝達し、研究副主任はデザインシートや見取りシート等のハード面を整えた。また、筆者は研究副主任として、学年ブロック研修会には積極的に参加して、本校にとって何が必要なのかを研究主任と語り合った。この取組を通して、本校の授業における課題を運営委員会や校内研修で伝達することができた。

校内研修部は、評価の在り方や生徒指導の研修を実施した。教務主任と連携を図り、本校に必要

な時期にそれぞれの立場から校内研修を行うことができた。

情報部は、ICTは本校のめざす児童像を実現するための手段であることを全教職員に伝達した。また、スカイメニュー、Teams、Kahoot!、パドレットといった手段の研修を行った。各学年の情報部は必ず参加することで、組織的に手段としてのICT研修を行うことができた。

6 研究の成果と課題

(1) 組織目標とのつながりについて

教職員が感じた課題から組織目標（共感的な人間関係の育成）が生まれたことは大きな成果と言える。意識調査の結果からも組織目標を意識して教育活動や授業づくりが行われたことが分かった。具体的には、「あなたは、組織目標を意識して自主課題を設定した。」の項目では、そう思うが60%、ややそう思うが40%、あまりそう思わないが0%、そう思わないが0%（平均値3.60）となった。この要因は、校内研修を行うことでどのような言葉を自主課題に入れればいいのかを共通理解できた点、組織目標が教職員側から生まれたことで自らの課題と合っていた点、の2点が考えられる。

(2) 校内授業研修会について

「あなたは、見取る視点をもって授業を参観している。」の項目では、昨年度の平均値が3.04に対して、今年度は3.72となった。これは、見取りシートに見取る視点を可視化したことによって、明確になったからだと推測できる。自由記述には、「授業を公開する側も、参観する側も視点が具体的に・明確に意識できるのがよかった。」といった内容があった。また、「あなたは、校内授業研修会を通して授業力・専門性が向上している。」の項目でも、昨年度の平均値が2.80に対して、今年度は3.40となった。校内授業研修会に関する意識調査では、大きな数値の上昇が見られた。本校の実態に合わせて、ハード面を整理したり校内授業研修会を実施したりしたことで授業力や専門性が向上し、満足のいくものになっていったのだと推測できる。

(3) 研修組織について

研究主任や情報主任への聞き取りでは、「授業づくりにフォーカスをあてられた。」「ソフト面とハード面を分けることで部会を定期的に関くことができた。」等の意見を聞くことができた。

意識調査「あなたは、3つの部会（授業研究部・校内研修部・情報部）の活動が、日々の授業実践に役立っている。」の項目では、平均値が3.44と高い数値となった。これは、研究主任・校内研修主任・情報主任が、ブロック研修会を参観して定期的に対話し、本校の課題、教職員のニーズにあった校内研修を行ってきたからだと推測できる。しかし、「あなたは、3つの部会の活動に積極的に参加している。」の項目の平均値は2.96であり、参加意識が若干低かった。3つの部会の主となる教職員が校内研修を開くことが多く、その他の教職員は受け身になっていたのかもしれない。

7 研究のまとめ

(1) 年度末から児童の実態を語り合ったことで、共感的な人間関係の必要感を全教職員がもつことができた。校内研修が授業実践に役立ち、活性化につながったといえる。

(2) 見取る視点を明確にしたことで、論点を絞って語り合うことができた。校内授業研究・研修組織の改編を通して、共感的な人間関係構築をめざした教育活動が展開された。今後は、教職員の取組をさらに活性化し、児童の学習活動に反映されているかを検証していきたい。